

せんしん

33号 2023年10月1日

相馬御風生誕140年  
童謡「春よ来い」100年  
記念号

御風会会報

### 相馬御風生誕一四〇年・童謡「春よ来い」 発表一〇〇年に寄せて

御風会会長 高瀬 衛

糸魚川が生んだ文人、相馬御風は明治十六年(一八八三)七月十日生まれで、今年に記念すべき生誕百四十年を迎えました。この間、多面にわたる功績が、全国に音色のごとく染み渡っています。殊に、童謡「春よ来い」は大正十二年(一九二三)三十九歳の時の発表であり、「ちらもちょうど百年を迎えました。

春よ来い

春よ来い

はやく来い

はやく来い

あるきはじめた

おうちのまえの

みいちゃんが

桃の木の

赤い鼻緒の

蕾もみんな

ジョジョはいて、

ふくらんで

おんもへ出たいと

はよ咲きたいと

待っている

待っている

児童雑誌「金の鳥」への発表が初出とされています。弘田龍太郎作曲、全国津々浦々歌い継がれています。暗い寒い冬も終わり近くなつて、ひたすら明るい春の来るのを待つ心持の童謡です。百年を経ても錆びない「心のひかり」が国民に宿っています。校歌「都の西北」、日本初の流行歌「カチューシャの唄」などとともにも愛されている名曲の作詞者、糸魚川が生んだ文人・相馬御風の輝きです。

### 『相馬御風書簡集下』に見る

#### ―地元糸魚川の人々との交流

金子 善八郎

一 糸魚川市教育委員会が二〇一八年三月一日に発行した表記の書簡集から地元の人三人―中村忠蔵・島道重平・月橋正樹―と、御風の交流のあとをたどる。

#### 二

まずは、中村忠蔵に宛てた御風の書簡。日付けは、大正十五年七月、封書だが「印刷」で、「消印」がない。

先日は此のやくざな私の為にまことに勿体ないほどの盛大な退耕十周年じゅうねん記念会を御開きくださいましたことは、ただただ感激の外は御座いませぬ。私はひそかに熱い感激の涙こぼしてゐます。そしてこの人知れぬ涙こそ私が皆様へ捧ぐる感謝の表現のすべてであります。皆様からいろいろ期待をかけていただくことは私の此の上ない苦しみです。

あの日ほど意味深いうれしさと、きまり悪さと、そして恥かしさを感じたことは、未だ嘗てありませんでした。『勿体ない』といふ心もちを本当にしみじみ感じさせていただいたのも、あの日が始めてでした。全くもつたないことだと思ひます。』

中村忠蔵は御風の九歳年下、市内押上の中村又七郎家の分家の人、銀行員、木蔭の会員。書簡は印刷で消印がないので、直接当日の出席者、あるいは幹事に届けられたものであろう。

それにしても、書き出しの「此のやくざな私のために」には驚かされる。御風は、こうした自己を卑下するような言葉は他に遣っていない。

当日の記念写真を見ると御風は、木島藤兵衛、池原祐三、松野泰助、松沢親雄など町の有力者、名士に囲まれている。退任して十年、こうした人達に支えられ、その囑望に応えて、無我夢中で生きてきた、そのことがこうした言葉につながっているのだろうか。



御風退耕10年記念歌会 山の井亭にて  
大正 15. 7. 10 撮影

長女文子の編集した『定本相馬御風歌集』(昭和五十八年)に、この日の歌が載っている。

「七月十日わが友あまた集まり我が為に退耕十周年記念歌会を開きくれたり、感謝の涙抑へ難し」

・目ににじむ涙おぼえつつ友どちの  
にぎはふ中にもだしわがおり

・うちもだしわがある部屋の明るさや  
みならば友の顔ながめつゝ

―「友どちのにぎはふ中に もだしわがおり」―この、究極の孤独を、集まった人たちはどう観ていたのだろうか。

中村忠蔵宛の書簡は、この他に二通残っている。いずれも「銀行員」としての中村に宛てたものである。

次はその、昭和四年八月一日付けの書簡。

とつぜん御迷惑の御事と存じますが右の件につき是非御高慮くださいますよう。

〜実は、田地の小作をしてある佐治平が来まして、地主の方から小作は本年限りでやめにする予告があった。今やめると「全く生活にさしつかえる」ので、何とか、小作を続けられるように地主に交渉してほしい。もし算盤上の利益の事なら、「私の微力を以てしても何とかならうかと思ひます」。どうぞ私に免じてよろしくお願い致します。

八月一日 相馬生

中村忠蔵様

退耕記念会から五年、このころには、出入りの「小作人」や親族の面倒を見られるようになったのであろうか。

同様な分家の借金を申し入れる「越後銀行／中村忠蔵様／親展御願」という手紙がある。

〜乍失礼書状を以て御願申上候 此書持  
参の相馬共平ハ小生分家にて、貴兄の御高配により銀行より二百円ほど貸していただくやうお取成し被下度 無論小生保証人として充分責任相果し可申候次第 右折入て御願申上候事に御座候。

同趣旨の次のような手紙もある。

〜此状持参の小生分家のもの金百円約手で貸していただきたいとの事、小生の保証で左様御願出来ますやう御高配に預かりたいのですが如何でせうか。

この手紙には「元金ハもう期限が来てゐるやうにおぼえてゐますがそれは月末か来月初めに必ず差出します」という御風本人の借金的事も書かれている。―御風自身の家計も必ずしも楽ではなかった。

### 三

島道重平宛ての手紙も金銭に関わるものである。

島道重平は、現在は廃業している「島道書

店」の経営者(店は本町通り山側)。元新潟日報記者、刈羽郡西山町出身、木蔭会メンバー、御風より十七歳の後輩。

手紙は、家計が苦しいので、良寛の屏風を売りたい、高く買ってくれる人を斡旋して欲しい、というもの。

毎度のことながら小生又自分の事やら子どもたちの為やら誰彼人様の為やら更に新たに着手すべき研究の準備の為やらですつからかんになりかけて来た、おまけに約二ヶ月寝てくらして来たので全く閉口此際思ひ切つて例の良寛さまの歌屏風の内二曲半隻分だけ手元にのこして、四枚一まとめにして誰か相当物のわかる人に買つて貰はうかと思ふ。〜何しろ天下無類のものですからね 涙の出るほど惜しいが背に腹はかへられぬわけ 御憐察を乞ふ。

文中「おまけに約二ヶ月寝て暮らして来たので全く閉口」は、体調が悪くて仕事(原稿を書くこと)が出来なかったことをさしている。

なお「富岡重憲君も良寛さまのものほしがつてゐました」という追つて書きの富岡重憲は、「富岡美術館」建設で問題になった旧今井村出身の日本重化学工業社長のことである。

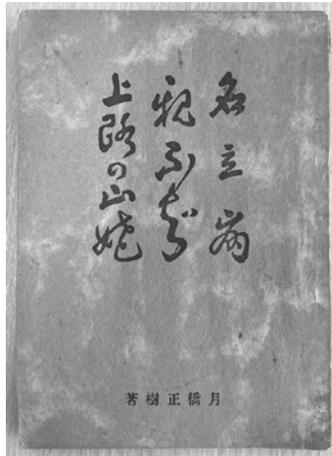
興味深いのは、この要請の理由。一、自分の事―家計の事、二、子供たちの事―御風は、当時文子が上京して大学生になり、下宿代や

学費の支払いに苦勞していた。三、新しい研究の準備―「歴代歌人研究良寛和尚」「良寛と貞心」出版のこと。

御風はここに、良寛の書を手放す理由をいろいろ挙げてはいるが、要するに家計のやりくりがつかなかったからである。こうしたことは、初めに「毎度の事ながら」とあるように度々の事であったという。

#### 四

月橋正樹は、糸魚川小学校の校長。柏崎の出身、『名立崩・親不知・上路の山姥』（昭和十七年）の著書がある。



月橋正樹著『名立崩・親不知・上路の山姥』

月橋正樹宛て御風書簡は、上記二人の書簡と趣が大分異なる。この書簡は、額装され、糸魚川小学校に保管されている。

謹てけふの佳き日を寿ぎまつりかしこみて聖寿の萬歳皇運の無窮を祈りたてまつり

ます。

陳は今日のこのありがたき日に当りましていささかお願いがありましたして此書したため貴意を得たく存じます。

拙著「辺土に想ふ」を以て私の著書の数が丁度百巻に達しましたので此の機会に母校に対する私の感謝の微意を表したく金壹百圓を寄付させていただきました。さしつかえなく、子どもさんたちの為に最もふさわしい心遣いとなるやうな良書を御選択御購入の上文庫中に相加へくださいますやう。

顧みますと明治三十八年以降私の世に出しました書物は総頁数二万八千頁、重ねますと壱丈余の高さになります。それにつけても私は最初自分を教育していただいた小学校の御恩を思ふ心いよいよ切なるものがあります。小学校の教育のありがたさに感謝の念禁じがたいのであります。

頓首

紀元二千六百年 慶祝日の朝 相馬御風

糸魚川小学校校長 月橋正樹殿

最後に書かれている、「最初自分を教育して

いただいた小学校の御恩を思ふ心いよいよ切なるものがあります」は、小学生のとき、御風はいじめに会い、そのために上級生と「友達条約」を結んだりして対応したことが知られているが、そのことを思い出しているのであろう。

同級生の中村又七郎(初代糸魚川市長は、回想記『おこぜ随筆』(昭和三十年)に次のように書いている

彼はヨナヨナした弱々しい容姿から通称をコンニャクといわれていた。それには彼は早くからマセていたと見えて、いろいろな女との噂も仲間の口の端に上り悪童たちから苛め者にされ、しじゅう泣かされていた弱虫であった。

「友達条約」は、二歳上の転校生、来海沢の猪又儀作との間で結ばれた「条約」。

「条約」には、二人の間柄を「兄弟同様」にするために、互いに悪口を言ったり争ったりせず、忠告し合い助け合うこと、など書かれている。

日付は「明治二十八年五月三十日」御風十二歳の時、宛先は「来海沢猪又儀作殿」署名の相馬昌治の下には「爪印」が押されている。

―こうして危機を脱した御風は、小学校卒業のとき「品行端正学力優等」につき表彰されている。

御風が高田中学(現県立高田高校)に進学したときの儀作宛ての手紙が孫の猪又儀門宅に残っている。これによりその後の御風―高田中学時代の様子や、卒業後、第三高等学校(現京都大学)を受験した経緯などがよく分かる。

―二人の交流は、終生続いたという。

## 寄稿

## おとなりのおじいちゃん御風先生

石坂あつ子さんからの聞き書き(後編)

小川 英子

「洗心」第32号からのつづき

☆があつ子さん、★が筆者

★昭和17年3月21日に、あつ子さんの母キヨシさんが亡くなられた。そのお葬式ときの御風のエピソードを話してください。

☆石坂家では、当主ではないし、先生はお忙しいからと、亡くなったことを隣に知らせなかった。

そのとき、御風邸の茶の間の窓(注1)と石坂家の台所の窓が近くて。お経が始まったら、先生は「お隣がにぎやかだが、法事か」と訊いたら、「お隣のお姉ちゃん(石坂キヨシ)が亡くなった」と聞いて、香典を持って急いで石坂家に来た。

うちのひい祖母ちゃん(注2)が、石坂家全員が直指院での葬儀に行つたので、留守を守つた。

先生は「式場はどこか」とひい祖母ちゃんに聞いて、急いで家に戻ろうとして、玄関の敷居に下駄の歯をはさんで転んでしまいそうになった。ひい祖母ちゃんは笑うわけにもいかないが、「キヨシ死んで悲しいのに、おかしよて、おかしよて(おかしくて)」と泣き笑いしてたと話してくれた。

あとで、「なんして知らせなかったんだ」と御風家に入りの人たちが先生に責められたんだと。

先生は家に戻つてすぐに着替えて、直指院に行き、その一般席(親族席の正面の席)の前列の真ん中に、羽織袴で正座しておられた。先生が遅れていらしたとしても、みんなは、「どうぞどうぞ」と譲るから、先生は前の正面に出る。

葬列のほうに、先生よりあとだった。どうやって行きなされたのか、歩いていったんかや。タクシーはまだなかったはず。だけ、葬列はおきん鳴らしながら、ゆっくりだぞいねえ。

私は御霊供膳(おりくぜん)を持つ係で、直指院に着くまでにお膳の上のお椀のおつゆをみんなこぼした。小学4年だったものね。(注3)

★戦争中の思い出も少し話してください。

☆私は幼稚園の卒園証書がいちばん立派。他はペラペラの紙。戦時中だから物資がなくて、今の新聞の折り込みチラシの紙よりもペラペラ。

戦後もそうだった。昭和25年か26年になれば、ノートとかも出てきた。

☆私の戦争についての一番先の記憶は、6歳ときの漢口陥落の旗行列(昭和13年10月)。旗行列は昼間で、夜は提灯行列をした。

あの頃、出征兵士を送るのに、ほら、よくテレビドラマであるでしょ。あんな風に、み

んなで見送った。西海(注4)の人たちも、大鼓をたたいて、ラッパを吹いて、旗立てて、石坂家の前の道路を通過して、駅に行つた。

ここは駅に近いから、駅によく見送りに行つた。

出征兵士は襷(たすき)をかけて行く。御風先生は頼まれて、襷の「武運長久」をだいぶ書かれたそう。

★昭和20年、13歳の時の長岡空襲を覚えていと伺いましたが。

☆8月1日の夜、警戒警報が鳴った。でも警報解除になって外に出てみると、御風先生も出てきて、ふたりで石坂家の向かい側の電柱の下で、空を見あげた。

B29が御風邸の屋根をかすめるような低空飛行で、堂々と灯りもつけたまま、東の方へ飛んでいった。幾機も幾機も飛んでいった。

あまりに多いので、御風先生はつぶやくように「あれは友軍機でしょうね」といった。

★もう日本は制空権を奪われ、迎え撃つ戦闘機もなかったということですね。

☆いったん家に入ったけど、近所の人たちのワアという声が聞こえたので、家の外に出てみると、東のほうの空が真っ赤だった。柏崎あたりだというならわかるが、長岡の火が見えたとは信じられないけど、真っ赤だった。

そのあと家に帰っていたら、また、近所の人たちのワアという声が聞こえたので、出てみたら、空に大きな満月が昇っていて、それ

があんまりに大きく、少し赤みがかった。なんだか満月を見たのは幻のような気がしていたけれど、あとでH先生やMさんが勘違いではない、私も見た。夢じゃない、ほんとにそんな満月が出たんだと話してくれた。(注5)

★8月1日から2日にかけて、長岡・富山・水戸・八王子の4都市に対し、集中的に空襲がありました。

長岡空襲は、8月1日午後10時30分から翌2日の0時10分まで続き、テニアン島から飛来したB29爆撃機は125機だそうです。富山は8月2日0時36分から、174機がサイパン島から来襲し、富山大空襲と呼ばれるほどの甚大な被害でした。

☆私はB29は富山を空襲したあと、そのまま、その飛行機が長岡に向かったと聞いた。残っていた爆弾を全部そこで落として(機体を)軽くして帰ったと。

★情報が錯綜していたのですね。富山空襲の火は見えなかったのでしょうか。

☆富山市は富山湾の中側だから、山に遮られて見えなかったのだろうと思う。遠い長岡が見えただよねえ。

★だから、日にちの混乱があったのでしょうか。

☆いろんなデマが飛んでいたからね。伊勢神宮の松の木に桜の花が咲いた、だから日本は勝つ、という噂とかデマも、聞いたことがある。

★この長岡空襲のことは、私の母(倉又久子、

大正11年生)も生前、話していたことがあります。母は航空機の監視をする役をしていたそうです。

北上(?)してきたB29が糸魚川上空(浜の波打ち際ぎりぎりのところ)(注6)で方向を変えて東のほうへ飛んでいくのを双眼鏡(?)で見ている、数を報告していた。数え切れないほどたくさん飛行機が飛んでいた。そしてそのうちに東のほうの空が真っ赤になってきた。怖ろしいことだった。そう話していたのを覚えています。

(?)は、そのように母は言ったと思うのですが、記憶があいまいなのでつけました。双眼鏡ではなく、目視だったかもしれません。

☆美山の今の糸魚川中学校が建っているところに、監視所があった。

学校を卒業した人たちはみんな、工場へ動員されていたけれど、跡取り娘は家に残されていた。だから、おまんた(あなたのお母さんは、駆り出されていた)。

★母は跡取り娘でした。糸魚川を離れなかったと聞いています。

☆家を離れての動員はなかったということよ。糸魚川のなかで動員されていた。

女学校出たての子に監視させられて、専門家でもないし、訓練を受けたわけでもないのに、かわいそうだちゃ。電話で報告してたか、モールズ信号だったかは知らんけん。

女学校卒業した礼子さん(筆者の叔母、母の2歳下の妹)は、たしか、柏崎の理研に、

たぶん理研だろうと思うが、動員されてたと思う。

礼子さんが「姉ちゃんはい。空襲があつても家族一緒に死ぬ。わたしはそうはいかない」て。そう言つて、家を離れることを嘆いたと聞いたよ。

あなたのお母さんは昭和14年か、15年の3学期頃、代用教員もしていた。私が小学2年か3年の頃だけだ。

人がいないからみんな、駆り出されていた。★働ける年齢の人はみんな、戦争遂行に動員されていたということですね。たいへんな時代でした。

★先ほどの警戒警報というのをもう少し詳しく教えてください。

☆警戒警報が鳴ると、灯りが外に漏れないように、暗幕引いて—電気(電灯)の笠に筒型のカバーをいつもつけていた。そうすると真下だけが明るくなる。それでも光が外に漏れないように、警報が鳴ると窓も雨戸も閉める—ほら、雨戸と雨戸の間、少し隙間があるでしょ。そこから光が漏れないように、暗幕引くの。

暗幕を引くと蒸し風呂だった。冷房などない時代で、普通の家には扇風機もなかった。

★解除というのは?

☆警戒警報のサイレンが鳴ると、外には出られない。解除のサイレンが鳴ると、出てもいい。解除はラジオでも知らせたし、警防団が回ってきて知らせたりもした。ラジオ持って

ない家もあったしね。警防団は灯りが漏れている家には注意した。

☆空襲がありそうな時は、空襲警報が出た。サイレンが鳴ったし、ラジオで「東部軍情報発令」といって、「B29が姫川上空で旋回中」とか。

☆糸魚川は空襲を受けなかった。このあたりで防空壕を掘った家はなかったと思う。押入の布団の中に隠れる程度かな。今の白嶺高校のグラウンドに穴を掘って、防空壕のようにしていたけど。

☆先生の奥さんの実家の藤田家から、糸魚川に疎開に来てられた。姪にあたる方かや、その人は私より一つ年上で、糸魚川の女学校を卒業した。

★御風宅と一緒に住んでいらしたのですか？

☆寺町に家を借りていた。同じ学年じゃなかったから、ご家族何人でも来てらしたかは知らない。その方のお姉さんも来ていたと思う。お姉さんはもう大人だったから、女学校には入らなかった。

☆みんな、神風が吹くと信じておったんだ。白い服は上空からも目立って飛行機の目安になるから、着られん(着てはいけない)、白は他の色に染めると言われていた。

私の友だち、能生の人だけど、その頃もう染料もないから、ヨモギを煮出してそれで白い服を染めた。それをしたのが8月15日。その作業をして汗をかいたから、目の前の能生

の海で泳いでいたら、だれかが「戦争終わった、負けた」と声をかけてきたので、「デマとばしたら、憲兵にひっぱられるよ。まだ神風吹かんね(だから戦争に負けるはずがない)」て、答えたて。それくらいみんな信じてたんね。

★昔の御風宅と現在の御風宅と違うところがありますか。

☆御風さんが昭和25年に亡くなって、空き家になったので、糸魚川小学校の校長先生や高校の先生や市役所職員さんなどが管理してらした。ご家族で住み込みで管理されていた。住み込み人がいなくなると、その後しばらくまた空き家になった。ほら、住み込みだと私生活というものが無いでしょ。見学の人が来るし。

空き家の管理は市役所がしていた。

そのときは御風邸の前の部分(現在の門から玄関までの敷道の脇部分)の石坂家側ではない方にも、池があった。

だけど、落ち葉が池に詰まって腐ってボウフラがわき、蚊が大量に発生したことがあったり、ザクロの木があつて、落ちた実が腐ったりした。

それで池に砂利を詰めて埋めてしまった。砂利だと池を復活させるときは、それを取り除けばいいんだから。

また、土蔵には蔦が這っていた。向かいの相馬伴治さんが国鉄を定年退職し

て、御風邸を管理するようになってきれいになった。伴治さんは鍵を預かって、見学の人がいると開けていた。

今はシルバーセンターの方たち3人が交代で来てくれているので、毎日、御風邸を開くようになったし、きれいになっている。(了)

注1 窓

現在、すりガラスになっている窓

注2 ひい祖母ちゃん

倉又家に嫁いだ石坂イヨ。御風と同級生だったとか。

注3 直指院

石坂家の菩提寺は寶傳寺(真言宗)。たまたまそのときは住職が亡くなられていたのので、近くの直指院(曹洞宗)を齋場として借り、同じ宗派の光明院から僧侶に来てもらい、葬儀を執り行った。

注4 西海

糸魚川町の東端を流れる海川沿いの村。

注5 満月

国立天文台に問い合わせたところ、8月1日の月の出は、23時30分(長岡空襲が始まって一時間後)。また、「月の出の直後は夕焼けと同じ理由で、赤く見えることがあります」とのことでした。しかし、当夜の月齢は下弦の半月に近い形で、満月ではなかった。ただし、「二十三夜の月で、かなり明るかったはずですよ」と。H先生もMさんも満月だといっている。空襲の夜の異様な印象がそう思わせた

のであるうか……。『あとで』というのは、数日後か、数年後かは、あつ子さんは覚えていないそう。幻のように思っていたのを、満月だった、私も見たとふたりに肯定してもらったことだけが記憶に残っているとのこと。

注6 糸魚川の浜

当時の浜は広く100mくらい砂浜があった。今とちがってテトラポットもなかった。昔は石坂家の裏手の浜にサーカスや大相撲が建った。横町の浜も広がった。(以上はあつ子さん談)

【御風作の「となり家」の歌】

『御風歌集』(大正15年・春秋社)より、「となり家」「隣の人」として石坂家を詠んだ歌

大正六年

冬いたる

となりやに餅つく杵のおとぞする今朝をあられの音のすごきに

大正十年

となり家の軒につるせる粟の穂にけさもさしたりあまつ日かげは

大正十二年

やみこやりあさな〜にわがきくはとなり家に飼へる鶯の聲

まじを打つ吹雪の音にまぎらひてけさも隣の鶯はなく

大正十五年

雪晴れ二首  
雪晴の朝のすがしさとく起きて子等と門への雪割りにけり  
門のべの雪をわりつゝあはぬ久しき隣の人と言かはしたり

※餅つきに関して

石坂家は土蔵(外蔵)の前で餅つきをした。冬の餅つきはたいいてい12月27日か28日に行った。2人ほど手伝いに来て、いつも三人杵でついていた。だから賑やかなので、隣で餅つきをしているとわかったのだろう。(あつ子さん談)

【本誌32号掲載の前編の関係資料】



糸魚川タイムス(平成25年9月1日付け)に掲載された写真  
明治43年 東京時代の御風と妻テル、長男昌徳(翌年逝去)



御風の父相馬徳治郎から、あつ子さんの祖父石坂善三郎に宛てられた絵葉書(大正4年11月13日付け)

「芸術座第一回上演」とある。メートルランク「内部」に出演の女優たち。須磨子は出演していない。

## 御風と交流のあった天屋・渡邊氏の人物像

岡村 鉄琴

筆者は現在、「新潟日報」朝刊文化欄に「看板 体を表す」というコラムを連載している。取材の中から相馬御風に関わりのある特筆すべき情報を入手できたので、骨格をここに紹介したい。

三島郡出雲崎町に営業していた書店、「天屋」主人渡邊氏についてである。まず出雲崎町の良寛顕彰者といえば第一に佐藤吉太郎(号・耐雪・一八七六〜一九六〇)が挙げられる。耐雪は一八九七年から十年間、三島郡の広域を販路とする書籍商でもあった。渡邊氏はこの書籍商の営業権を引き継ぎ、合わせて良寛を含む郷土文化を愛好する精神をも見習った人物と思われる。

ここからは渡邊家の系譜を、主に同家過去帖によつてみてみよう。まず、初代天屋藤藏。「長岡町ヨリ縁付ク」と記述がある。二代目は「同右」、三代目も「同右」、即ち襲名している。また「蒲原郡杣木村河野氏ヨリ縁付ク」とある。四代目も藤藏を襲名。但し「渡辺ノ姓トナル」とある。別の記録も重ねてみると、四代目の本名は民七。明治二十五年三月十二日、三十六歳没か。この人の長男徳四郎は大正七年十二月十六日、四十歳没。五代目を継いだのは民吉。「書籍販売業 四男ナレドモ故アリテ家ヲ嗣グ」とある。昭和

二年(一九二七)八月四日、五十四歳没。法名「釋樂正」。

六代目は民吉(越村)。「同右 前名吉二、父ノ歿後民吉ヲ襲名、実子ナク妻ノ弟ヲ迎エテ養嗣トス」とある。父・五代民吉の亡くなつた後、昭和二年九月に「民吉」を襲名した『無量の愛』参照。父の一人っ子で、この六代目は昭和十六年一月二十四日、四十一歳で没した(一九〇〇〜一九四二)。法名は釋是信。

七代目は、六代目の妻・キクノの弟。「同右 前名一榮 養父歿後民吉ヲ襲名、大東亜戦争ニ出征中、ビルマニ於テ歿ス」とある。昭和十八年八月二十八日、三十歳。すると大正二年(一九一三)頃生まれか。

八代目は秀英。戦死した七代目の弟で、養子になった。そして九代目は現当主秀夫氏。父秀英、母旧姓柳氏の子として昭和二十八年(一九五三)十二月三十日生。

ご当主のご好意でたくさん珍しい書画資料を拝見出来た。まず御風に絞つてみると、御風から渡邊民吉あてハガキ数通があった。

① 「賀正 乙丑元旦 相馬御風」(T 14 賀状)  
② 「新しき年が：よき年でありますやう切念いたします 大正十五年一月元旦 越後糸魚川町 相馬御風」(印刷物)

③ 「出雲崎おけさ節ありがたく頂戴しました よく集められたるをありがたく思ひます 但し巻頭「良寛上人作」は至極あやしいも

のだとおもひます これは再考を煩したく思ひます 八月三十日 相馬御風」(S 15・8/31消印)

④ 「霖雨鬱陶しく候処弥々御壮健奉賀候 雲水良寛御恵送にあつかり奉感謝 まだ読んでみませんので尚一層うれしく存候 取急ぎ 御礼まで 七月五日 糸魚川町相馬御風」(S 11・7/6消印)

⑤ 先日は参上一方ならぬ御厚情にあつかりまして何とも御礼の申やうもございませぬどうぞ貴兄から皆様にくれぐれよろしくお伝声のほど御願いたします いづれ又今秋まゐりまして御目にかかる事とおもひます 敬具 六月二十六日 糸魚川町相馬御風」(消印不明)

⑥ 「賀正 相馬昌治」(消印不明)

一方、糸魚川歴史民俗資料館には、渡邊民吉から御風あてに発信したハガキ三通が残っている。昭和七年、三十二歳と入つた賀状。

昭和四年の賀状には、書店開業二十周年記念に中村不折が書き贈つた額「家祖餘澤」を絵ハガキに仕立て用いて、「二伸 毎々絶大なる御愛顧を賜りし当店儀書店開業以来爰に二十週年を迎ひ候段 海山の御恵を拝謝致し尚幾千代の御鼻頂を賜度候」と印刷を付している。

三通目、喪中のため賀状差出しを遠慮する印刷ハガキを出している(消印S 12・1/1)。以上から気付くことを、箇条書きにしてみ

る。

○六代目民吉(一九〇〇〜一九四一)が御風

(一八八三〜一九五〇)と親交があった。

○大正十四年から昭和十五年までの交際資料が残る(民吉は昭和十四年没)。

○民吉の先代が天屋書店を開業した。

○民吉の書店営業は盛業だった。

○あわせて『出雲崎おけさ節』『雲水良寛』等の冊子を発行し、御風に贈呈している。

これを受けて、伝わる資料の原物を拝見した。『名物出雲崎おけさ節』(T15 渡邊書店刊)の巻頭には「おけさ節は古来より出雲崎特有の名物である、近來各地に於ておけさ節の流行あるも本より出雲崎おけさに及ぶものはないのである」と、この一文からだけでもふるさとと芸能文化を愛する心情が読みとれよう。事実、他にも小冊を含む多くの郷土資料の刊行を手掛けている。

そして御風の手紙で問題にしていた「良寛上人作 おけさ」五首を収載している。次のようなものである。

□殿さ歸へりやれ夜が更けました

天の川原のにし東

□庭のしら石殿さと思ふて

すでに戸あけて入りよと思ふた

□たばこ一葉が千兩しよとまゝよ

君がねたばこたやすまい

□人がつんとしたらつんとして御座れ

負けてござんな一日も

□天上起つ鳥南蠻味噌つけて

三保の松原醫者さわぎ

当然民吉は良寛をふるさと文化の中心として、関連する資料の蒐集や刊行物にまとめることに努めている。

書店の経営は、各地中央の名士との交流にも発展しやすく、民吉はそれに積極的に関与した。仏心あつく誠実な人柄で、当時の教育に思いを寄せている。

残された多くの資料中、とくに大切にされた十二人の名士の書簡を貼り込んだ屏風がある。中に御風のものを含んでおり、全文を転記する。

「重ねての御手紙拝見しました  
たそれではまゐる事にします  
十七日の夕刻までにまゐります  
但し講演は十九日にしていた  
だけないでせうか、と云ふのは今回小生  
の御地へまゐるのを機として良寛和  
尚のいせき巡りを一しよに  
したいと云ふ人が二三人あるの  
で それらの人々を同伴して  
まゐるので、十八日はそれらの  
人々と島崎と国上へまゐり  
たいのです それらの人々は  
日曜一日を利用してまゐる  
人たちののですから、もしさう  
御願出来れば どんなによろ  
こぶ事でせう 講演は十

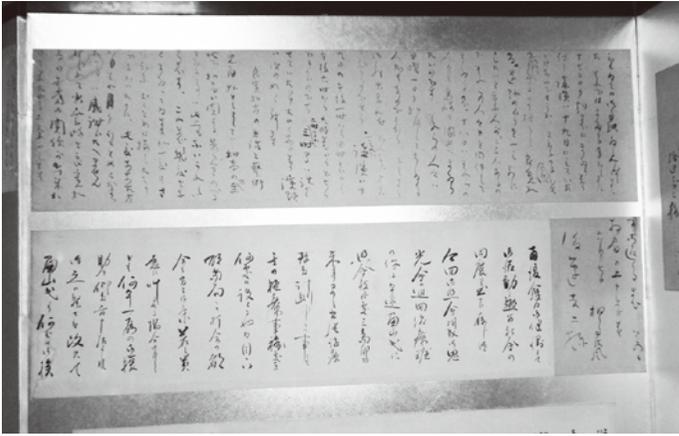
九日の午後一時から四時まででも  
午後六時から九時まででもどちら  
でもよいのです 二時間か三時間は話さ  
せていただきますたく思ひます 演題  
は次の如く致します

良寛和尚の生涯と芸術

兎角私としましては 和尚の生誕  
地で和尚に関する愚見をのべる  
と云ふ事は此上もない うれしい  
事です これまで幾度とな  
くまゐつてゐますが一度もさ  
う云ふおもとめに接した事  
がなかったのに、此度あなた方  
がそれをおもとめくださつ  
た事は感謝にたへません  
はじめて出雲崎と良寛和  
尚の本当の關係が出来か  
けて来たやうな気がします  
右御返事まで 万々  
拝眉の上申し上げます  
六月七日 相場御風  
渡邊吉二様

紙面上、年不詳ながら糸魚川歴史民俗資料館におたずねしたところ、大正十一年分と思われる回答が得られた。

もっと紹介したい資料があるが、一部郷土資料を列挙し、また別稿で考察を試みたい。



渡邊民吉宛 御風書簡 (屏風より)

○天屋発売多はがきファイル一冊○『無量の愛』○『長生院智現上人を偲ぶ』○『名物出雲崎おけさ節』○『良寛と其信仰』○『刈羽郡内郷村の前身多岐郷に就て』○『越後上代と宇奈具志神社考』○『出雲崎史料 羽黒町誌』○童謡良寛さま一枚○糸魚川御風資料(一括ファイル入り)○アルバム二冊○絵ハガキ良寛遺宝○『オーロラ』○『仏光叢誌』○『日本海民謡』○『おけさ節考』○『神祇及び神祇道』○『越佐之史迹』○良寛てぬぐいふきん一枚○宮崎童安手紙(ファイル入り)○短冊コピー一括

(越佐文人研究会代表・新潟大学教授)

### 早稲田史学の祖 西村真次

榊 正喜

西村真次と御風、そして糸魚川との関わりは詳らかではない。青木重孝監修『糸魚川市史1』ではわずかに、長者ケ原遺跡を訪れた人々の項で、旧制糸魚川中学校での講演会に西村が招かれ、同遺跡に言及したことが簡単に記されているのみである(講演会は大正10年1月24日。青木は卒業間近の3年生)。

ところが、西村を調べるうちに、いくつか興味深い記述や足跡に出会った。以下、それを簡単に紹介していく。

#### 1 西村の略歴

明治12(1879)年3月生まれ。三重県出身で、尋常小学校卒業後は大阪で仕事をしながら勉学。明治36年、東京専門学校に入学、坪内逍遙に師事し文学を専攻。のち坪内の勧めで考古学研究を開始。大正7(1918)年から同校講師、日本史と人類学の講義を担当し、大正11年に教授となった。考古学、歴史学、民俗学、文化人類学を横断的に研究、各分野に精通し足跡を残した。昭和18(1943)年没。早稲田史学の祖とされる。

西村は御風より5学年上だが、大学では1年後輩となる。二人とも同時期に早稲田大学に在学し、かつ同じ坪内門下という共通点がある。

#### 2 御風宛書簡

御風宛書簡は年賀状4通のほか、封書2通が残される。昭和3年大火見舞いと、昭和7年の妻テル逝去の悔やみ状である。「お子さま達はもう大きくなられたでせう」「小さい、美しい、やさしい、北国の吹雪の中で発見された時いたはしく思はれた奥さんでした。」など糸魚川の御風宅を訪問した過去を窺わせる。

#### 3 御風著書での紹介

西村は古代船舶の研究にまず着手し、これは大正6年からの『日本古代船舶研究』シリーズとして結実している。

これに関し、御風は「野を歩む者」第三号(昭和5年12月)の身辺雑記で回想している。「私の友人で現代に於ける人類学及び史学界一方の権威と目されてゐる西村真次君」が、古代船舶研究の資金繰りに苦労している。それを見かねて新聞に「この船成金の多い世の中に船で貧乏をしてゐる学者がある」と紹介した。その結果「研究を物質的に援助してくれる篤志家が現れ」というものである。

#### 4 糸魚川での調査研究

現在に伝わる御風蔵書に含まれる、西村の著作『国民の日本史 大和時代』、『万葉集の文学史的研究』を紹介する。

『国民の日本史』(早稲田大学出版部)は14篇までの叢書で、第一篇『大和時代』(大正11

年)は西村の著である。興味深いのは「原日本人の社会生活」の節中、本文で述べたことへの注釈個所である。

私は越後の西頸城郡に於いて、聚落発達の歴史地理的研究を試みたことがある。同郡には名立川、能生川、西早川、姫川、青海川などの八溪谷があつて、いづれも急傾斜の河床が南から北に向つて走つてゐる。中でも一番大きいのは姫川で、糸魚川から始めて其両岸に多数の聚落が出来、河川を遡つて遙かに信濃の大町まで続いてゐる。

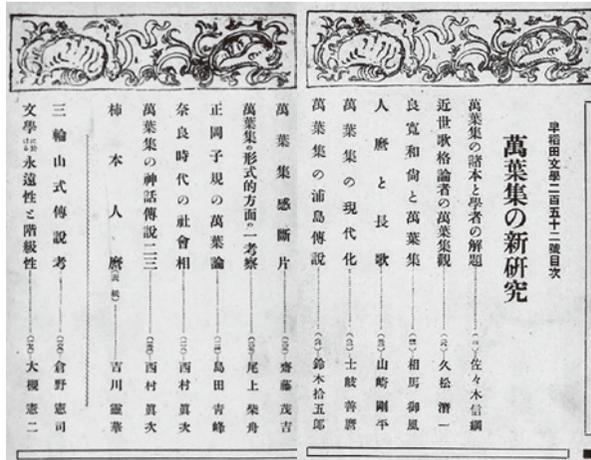
次に、『万葉集の文学史的研究』(昭和3年)の興味深い記述を示す。万葉時代の「衣服及び装身具」のなかでも「玉」について述べたものである。

かうした時代に玉がどうして得られ、どうして造られたかは興味の多い問題であるが、一般には出雲其他の諸国に玉作部といふ世襲的職業団体があつて、それを供給してゐたと考へられてゐる。けれど実際に於いてはさうばかりではなく、一般民衆も河原や浜辺で美しい石を見つけて、それを玉にすり磨いたこともあつたことが次ぎの歌で知られる。

「沼名河の底なる玉、求めて得し玉かも、拾ひて得し玉かも、あたらしき君が老ゆらく惜しも」(巻十三)

「信濃なる千曲の河のさざれしも君し踏みてば玉と拾はむ」(巻十四)

又ナ河の名は本来「瓊の川」を意味してゐるから、河原などで軟玉、硬玉を拾つて来るのが普通であつたらしい。千曲川の河原石はたゞの石だが、あなたが踏んだから玉として拾はうかといふ感じが、さうした理由から起つて来たのである。



万葉集の新研究が特集された「早稲田文学」(目次では「奈良時代の社会相」となっている)

本論の初出は「早稲田文学」大正16年(昭和2年)1月号掲載の「万葉集」に現はれた「社会相」である。本号は「万葉集の新研究」特集で、御風も「良寛和尚と万葉集」の稿を寄せているため、西村の稿にも当然目を通していると思われる。なお、この西村の稿では

沼名河、又ナ河と糸魚川の関係については言及されていない。

また、御風蔵書にはないが、西村著『日本古代社会』(ロゴス書院 昭和3年)の、古代の貿易についての章では以下の興味深い記述がある。

二回の越後探索によって、私は西頸城の海岸台地、殊に糸魚川の南方に連亘するそれに於いて、淡緑色の美しい石理を有する蛇紋岩から造られた多数の磨製石斧を発見し、それに一種の地方色のあることを知つた。そして久しくその産地を模索しつゝあつたが、大正十一年度の姫川溪谷探検によつて、それが糸魚川を距る十数哩の姫川上流にあることを知り、そこから糸魚川附近まで遙々と此石材の搬出されたであらうことと推想し、信越間の古代交通路を還元する上に大きな力を得た。

つまり、大正11年時点までに西村は少なくとも3回は糸魚川に来てゐる。冒頭の旧制糸魚川中学校での講演会もそのうちの行程に含まれるのだろうか。また、御風宅を訪問し、調査研究の趣旨を述べ意見を交わしたとも推察できるが…。

そして、この探検時に「淡緑色の美しい石理を有する蛇紋岩」の産地が姫川上流とわかつたと言及していることは、ヒスイ再発見史に新たなヒントを与えてくれる。

最後にもうひとつ紹介する。「考古学雑誌」第29巻第9号(考古学会 昭和10・9・15発行)である。

「新聞所見」(学界の動きを新聞記事を転載するかたちで紹介)で、「石器時代の玉造りの遺跡か」と題する東京朝日新聞新潟版の記事(昭和10・8・9付け)が転載されている。

ここでは青海町田海地内の遺跡(大角地遺跡)と出土物、10年前に遺跡を発見した倉若七郎氏と御風によって毎年調査が進められていること、「同地一帯を心なき人々に荒される事を心配」しながらの御風の推察が紹介されている。倉若氏は御風が糸魚川に帰住してから、「二十年この方といふもの常に相馬氏のお伴をして歩き、その間また相馬氏の招きにより調査に来た西村真次博士や故高橋健自博士等のお伴を」してきた。とある。

これら西村や御風の動きを見るに、大正年間すでにヒスイが当地の姫川上流で産出すると知られていたようだとする話※『長者ヶ原』藤田亮策 1964)も信ぴょう性が増してくる。

今後も調査を続けてみたい。

※「小滝川の原石に就いては、何時頃何人の発見かを明にし得ないが、大正年間から糸魚川附近の人々に知られていたらしく、昭和10年頃にこの転石の配置を記入した地図ができて上がっている。」

### 「春よ来い」初出本の紹介



↑「はよ咲きたい」の「咲」が「吹」と誤植された。  
↓楽譜では「はよ咲きたい」となっている。



大正11年4月1日、金の鳥社(事実上「中央仏教社」の経営と言われる)が、児童文学者の巖谷小波らを顧問とし、児童向け雑誌「金の鳥」を創刊。創刊の趣旨を「純日本の精神の涵養」にあるとした。中央仏教社は曹洞宗大学(現駒澤大学)と大いに関係がある。御風が同誌に断続的に童謡作品を発表したのは、良寛禪師や巖谷小波との縁によるのかもしれない。  
かくして大正12年(1923)、「金の鳥」3月号で「春よ来い」が発表された。作曲は弘田龍太郎。以来、百年経った今でも色褪せることなく全国で愛唱されている。

# 令和4年度 御風会 事業報告

□御風忌 中止  
□総会

令和四年七月十四日 午後四時半

会場 割烹倉また

□会報「洗心」第三十二号発行

令和四年十二月一〇日、六百部

□理事会(二回)

・令和四年六月十六日 午前十時

・令和五年三月二十九日 午前十時

□相馬御風顕彰ふるさと短歌大会への協力

賞品提供 児童生徒の部へ図書カード

令和四年十一月二十六日

会場 ヒスイ王国館

【御風賞(最優秀賞) 作品の紹介】

一般の部

原 比呂子 様(大分県国東市)

雪解川父母眠るふる里を捨てた記憶が押し

し寄せて来る

児童・生徒の部

和田 華帆様(糸魚川高校1年)

スカートに残る絵の具の白いシミみんな

にはない私の思い出



## お悔み

御風顕彰に長い間ご尽力された会員が他界されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

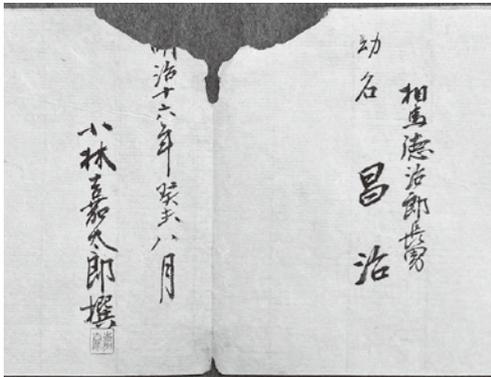
■池原 英男 様 令和五年六月逝去

■片山日出海 様 令和五年九月逝去

## 会員募集(年会費は二千元)

御風会では新規会員を募集しております。年会費は二千元。本紙をご覧になられた方で希望する方は、事務局までご連絡ください。

## 《表紙紹介》



平成二十八年、相馬御風宅の修理復原工事の際、中土蔵二階の長持の中から発見された資料である。虫に喰われている箇所以外は比較的状态がよい。

相馬徳治郎長男

幼名 昌治

明治十六年癸未八月

小林嘉太郎撰



明治十六(一八八三)年七月十日、糸魚川で代々社寺建築業を営む相馬家に男児が生まれた。東京では鹿鳴館が落成し、文学に革命をもたらす坪内逍遙が東京大学を卒業、東京専門学校講師となった年である。糸魚川では「如砥如矢」の親不知の新道が開通した。

徳治郎は男児の命名を、名門小林家(江戸時代に町年寄を務め、参勤交代の本陣でもあった。現在の加賀の井酒造。)の当主嘉太郎に依頼。男児は「昌治」と名付けられた。後の御風である。

## 【編集・発行】

御風会(事務局・相馬御風記念館内)

〒941-0056

新潟県糸魚川市一の宮1-2-2

電話番号 025(552)7471